

自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識 を介して対人関係満足に及ぼす影響

田 中 優 ・ 高 木 修

The Effects of Self-Evaluation, Self-Acceptance and Self-Esteem on Satisfaction of Interpersonal Relationship through Consciousness of Reciprocal Interpersonal Relationship.

Masashi TANAKA and Osamu TAKAGI

Abstract

The present study examined the effects of self-evaluation, self-acceptance, self-esteem on satisfaction of interpersonal relationship through consciousness of reciprocal interpersonal relationship. Students of a women's university (N=94) answered a questionnaire. Path analysis indicated 1) self-disgust of self-evaluation influences consciousness of compensation through self-acceptance and self-esteem, 2) evaluation apprehension from other of self-evaluation had a direct positive effect on satisfaction level of interpersonal relationship, 3) consciousness of reciprocity of reciprocal interpersonal relationship had a direct negative effect on satisfaction level of interpersonal relationship and 4) self-disgust of self-evaluation had a direct negative effect on satisfaction level of interpersonal relationship.

Key Words: Consciousness of Reciprocal Interpersonal Relationship, Satisfaction of Interpersonal Relationship, Self-Evaluation, Self-Acceptance, Self-Esteem

抄 録

本研究の目的は、自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響を明らかにすることである。女子大学の94名の学生を対象に質問紙調査を行い、パス解析の結果、1) 自己評価の自己嫌悪が自己受容と自尊心を媒介して返礼意識を規定する間接効果と、2) 自己評価の他者評価懸念が返礼意識を規定する正の直接効果が認められた。また、3) 互恵的対人関係の互恵意識が対人関係満足度を規定する正の直接効果と、4) 自己評価の自己嫌悪が対人関係満足度を規定する負の直接効果が認められた。自己評価は互恵的対人関係意識の返礼意識を規定し、互恵的対人関係の互恵意識は対人関係満足度を規定することが明らかとなった。

キーワード：互恵的対人関係意識、対人関係満足、自己評価、自己受容、自尊心

問 題

1. 「互惠性」、「互惠的關係」という概念について

1) 2つのタイプの対人関係：交換的關係と共同的關係

対人関係の捉え方は、時代とともに変化する。これに対応して、近年、社会心理学における援助研究やソーシャル・サポート研究においては、これまでの、どちらかといえば静態的・一時的な対人関係の研究に加えて、動態的・継時的な、ある程度持続するダイナミックな対人関係における援助やサポートを扱う研究も行われるようになった。このような対人関係においては、「たよる」側と「たよられる」側からの双方向のやりとりがあり、その立場が交互に入れ替わることが多い。

Clark & Mills (1979) は、二者間の交換を支配する規則、あるいは、規範に基づき、対人関係に交換的關係と共同的關係の2つのタイプが存在すると指摘している。前者の交換的關係では、過去に受け取った何らかの利得によって生じた借りを返すために、あるいは、将来のお返しを期待して先行的に、利得が供与される。この関係は、一般に、見ず知らずの他人、顔見知り程度の知人、仕事上のつき合い程度の他者などとの浅い関係においてみられる。

一方、後者の共同的關係では、利得が相手の欲求に応じて、あるいは、見返りを期待せずに相手を満足させる目的で与えられる。この関係は、一般に、家族関係、恋愛関係、友人関係などの親密な関係においてみられる。

Clark, Ouellette, Powell, and Milberg (1987) は、個人が交換的關係と共同的關係のそれぞれをどの程度志向するかについて、個人差変数として、交換的關係志向性と共同的關係志向性を指摘している。なお、諸井 (1993) は、この2つの関係志向性が相互に独立であることを明らかにしている。

このClarkらの2つのタイプの関係を衡平理論の視点からみると、交換的關係においては、利得の均衡状態、過剰利得状態や過少利得状態、あるいは、互惠的(均衡)状態が重要になる。他方、共同的關係においては、二者間における利得の均衡状態は重要ではなく、利得を受ける相手の満足が重要となる。つまり、交換的關係は衡平理論から説明できるが、共同的關係は衡平理論から説明できないのである。

2) 「互惠性」、および、「互惠的關係」という用語の捉え方：援助行動研究と社会的交換理論研究における違い

「互惠性」、および、「互惠的關係」という用語の意味を考えると、Gouldner (1960) の「受け取った恩恵に対しては、同等の恩恵を返報しなければならない」という互惠規範の考

え方がその基礎となる。しかしながら、社会心理学における援助行動研究と社会的交換理論研究の間には、その捉え方において、以下のような違いがみられる。

まず、援助行動研究においては、援助行動を規定する要因の1つとして、互恵規範を取り上げる。そして、①援助が被援助者に多大な効果をもたらした場合、②援助者が苦しいなかで助けを申し出てくれた場合、③その援助が利己的動機からではなく愛他的動機によって行われたと認知した場合、さらに、④援助者が自発的あるいは意図的に援助してくれたと認知した場合、被援助者は援助を高く評価し、援助者に対する返礼を熱心に試みる（西川、1987）。換言すれば、互恵規範による援助行動の説明では、①被援助者が得た恩恵、②援助者が被った援助コスト、③援助者の愛他的動機、そして、④援助の自発性が、互恵的な援助行動の生起を左右するとされる。また、被援助者が、自分が受けた援助を援助者の自分に対する好意的関心の表れとして捉えたならば、被援助者は、援助者に対して好意的感情をいただく。そして、受けた援助に対して被援助者が高い価値を付与するほど、この好意的感情は互恵的意識を強めるとしている（Tesser, Gatewood, & Driver, 1968）。すなわち、被援助者の援助者に対していただく好意的感情は、援助者に対する互恵的行動を生み出す源泉となるのである（Nemeth, 1970）。

これらの知見が示すように、援助行動研究において関係が「互恵的」であるという場合、援助者の愛他的態度、あるいは、援助者と被援助者の双方への好意的感情などが重視されており、関係が「愛他的」や「好意的」であるというニュアンスが含まれている。

一方、社会的交換理論に依拠した研究では、基本的に人間は利己的であるとの前提に立ち、人は他者との相互作用から生じる利益を最大化しようと動機づけられていると考える。そして、投入と成果の比率を交換率とし、対人関係において自他の交換率が均衡している状態を「互恵的状态」と定義する。また、自分の交換率が他者のそれを上回っている場合を過剰利得状態、逆に、自分の交換率が他者のそれを下回っている場合を過少利得状態として区別している。要するに、社会的交換理論においては、対人関係における自他の利得が重視されるので、関係が「互恵的」であるという場合、二者間における利得の均衡状態が重視され、「均衡的」というニュアンスが含まれている。また、互恵性を問題にするソーシャル・サポート研究の多くは、社会的交換理論の衡平理論に依っている。そのため、ソーシャル・サポート研究における互恵性は、サポートの授受の均衡状態に注目し、社会的交換理論の立場をとっている。

2. 互恵的相互依存関係

これまでの研究では、ある程度持続する親密な対人関係を説明する概念として、「依存」や「愛着」が用いられてきた。しかし、Gurian (1984) や Johnson (1993) は、より現実に即した対人関係を捉えるという立場から、「相互依存」という概念で対人関係を説明しようとしている。本研究では、Gurian や Johnson と同様に、「相互依存」という概念を用いて、より現実的な対人関係の説明を目指す。つまり、相互依存関係を、依存と支援の双方向のやりとりから特徴づけようとするのである。

本研究が焦点を当てるある程度持続する対人関係とは、具体的には、家族関係、恋愛関係、友人関係などを指す。これらの関係においては、「自分に恩恵を与えてくれた他者に対して、自分も同等の恩恵でお返しをしたい」という、利得の均衡化を意識する。その一方で、「恩恵を与えてくれた他者に好意的感情をいだき、その相手に対しては、自分が得た恩恵以上の恩恵を与えたい」という、愛他的な意識をいだく場合がある。この両者を比べた場合、親密な対人関係の特徴は、前者よりも後者の意識の方が、より一層適合すると考える。それゆえに、本研究においては、「互恵性」あるいは「互恵的關係」と表現する場合、愛他的なニュアンスが一層含まれると考える。

要するに、本研究で問題とする「相互依存関係」には、互恵的な動機に基づく依存と支援の双方向のやりとりが含まれることを前提としており、このことを強調するために、親密な対人関係における相互依存関係を「互恵的相互依存関係」と表現する。

3. 互恵的相互依存関係の捉え方

田中 (2005, 2006, 2007a, 2007b) は、対人関係における依存と支援の双方向のやりとりには、個人と個人の間において依存行動と支援行動がやりとりされる「個人間互恵的相互依存関係」と、個人内において依存欲求と支援欲求とが影響を与え合う「個人内互恵的相互依存関係」とがあり、ある程度持続する対人関係では、個人間での依存と支援の影響過程と個人内での依存と支援の影響過程とが、相互に規定しあいながら展開すると仮定している。

1) 互恵的相互依存関係の個人間過程モデル

(1) モデルの概要

互恵的相互依存関係の個人間過程モデル (図1) は、「互恵的相互依存関係」に関わる当事者間で交わされる依存行動と支援行動の双方向の影響過程をあらわす。つまり、モデルは、互恵的相互依存関係を構成する個人Aと個人Bの間で交わす依存行動と支援行動のや

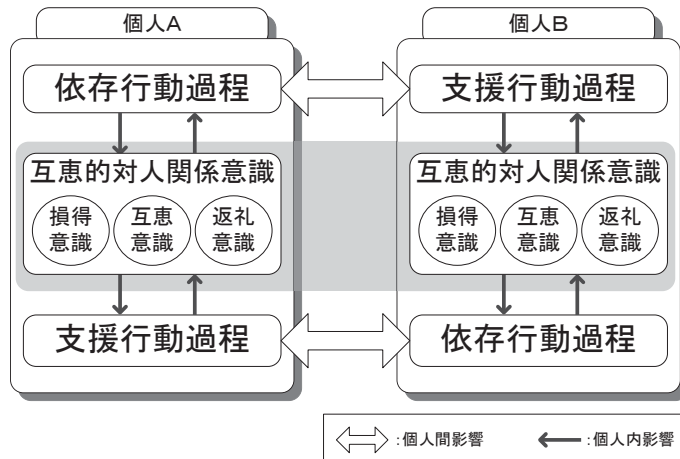


図1 互恵的相互依存関係の個人間過程モデル

りとりをあらわしており、このやりとりが互恵的な相互依存関係の維持、強化、解消に影響を及ぼす一連の過程を示している。

(2) 個人間影響

モデル図の白い双方向の矢印は、依存行動と支援行動の双方向の影響、つまり、「個人間影響」を示す。モデル図上部の矢印は、個人Aから個人Bへの依存行動と個人Bから個人Aへの支援行動のやりとりを示す。モデル図下部の矢印は、個人Bから個人Aへの依存行動と個人Aから個人Bへの支援行動のやりとりを示す。

他者への依存行動や支援行動では、「どのような内容（道具的、情緒的など）」を「どの程度」、相手に求めるか、あるいは、提供するかが重要な問題となる。すなわち、「内容」とは、依存や支援の「機能」であり、「程度」とは、依存や支援の「強度」である。個人間影響においては、依存者から支援者への依存行動と、支援者から依存者への支援行動とについて、それらの「機能」、および、「強度」の二者間における一致の程度が重要となる。二者間において、一致の程度が釣り合っている場合は、互恵的相互依存関係は維持、強化されるが、釣り合っていない場合は、関係は不安定となり、解消に至る場合もある。

2) 互恵的対人関係意識

モデル図中央部に位置し、個人Aと個人Bの対人関係意識にまたがる灰色の部分には、両者の互恵的対人関係意識の一致の程度をあらわす。

互恵的対人関係意識¹⁾は、依存行動と支援行動から成り立つ互恵的相互依存関係のあり方に対する個人の態度であり、互恵意識、返礼意識、損得意識の3つの意識から構成され

る。

(1) 互惠意識

互惠意識とは、依存行動と支援行動とから成り立つ互恵的な対人関係に対するポジティブな態度である。つまり、「依存者が得た効果と支援者が得た成果に対して、感謝や満足の気持ち、そして、相手への好意的感情をいただき、依存して、あるいは、支援してよかった」、また、「互いに支え合う対人関係は望ましい」という気持ちから、互恵的な行動を動機づける態度である。

(2) 返礼意識

返礼意識とは、依存行動において、衡平理論の「過剰利得状態」を強く意識する態度である。つまり、自分が依存によって受けた大きな恩恵と相手がそのために被った大きなコストや負担の点から心理的負債感をいただき、相手に申しわけなく思い、相手にお礼をする気持ちから、「他者から支援を受けた場合、自分が得た恩恵や他者が被ったコストに見合うだけのお礼をすべきだ」という考えから返礼行動を動機づける態度である。

(3) 損得意識

損得意識とは、支援行動において、衡平理論の「過少利得状態」を強く意識する態度である。つまり、自分が支援のために被った大きなコストや負担と相手がそのために得た大きな恩恵の点から心理的負担感をいただき、自分は割に合わないと思ひ、相手に償いを求める気持ちから、「他者に支援を与えた場合、そのために自分が被ったコストと他者が得た恩恵に見合うだけのお礼を求めて然るべきだ」という考えから返済行動を動機づける態度である。

互恵的対人関係意識は、それらの基盤となる依存欲求や支援欲求の程度、および、依存行動評価や支援行動評価を規定する。これとは逆に、依存行動評価の結果や支援行動評価の結果は、互恵的対人関係意識を規定する。すなわち、互恵的対人関係意識と依存行動過程、および、支援行動過程は、相互規定的な関係にある。

個人Aと個人Bがそれぞれいづく3つの互恵的対人関係意識の様相と、二者間でのそれらの一致の程度が、互恵的相互依存関係の維持、強化、解消に影響を及ぼす。二者間で一致している場合、互恵的相互依存関係は、維持、強化される。しかし、つり合っていない場合は、関係は不安定になり、解消に至る場合もある。

4. 自尊心、自己評価、および、自己受容と対人関係

梶田(1988)によると、自尊心は、心理的土台として不可欠なものであり、これを十分

自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響（田中・高木）

にもたないまま生きていくことは困難であるとしている。自分自身を基本的に価値あるものと考えることができ、自らの重要性を実感できる場合にのみ、私たちは意欲的で積極的であることができるし、また心理的な充実感をもつことができる。逆に、何らかの理由で自尊心を喪失したような場合は、うつ的气氛が強まり、心身ともに病んだ状態となる。自尊心の高低が対人関係にも影響を及ぼすと考えられる。例えば、城崎・藤原（2005）によると、自尊心が高い人は対人関係において、他者からの評価を気にせず、自分に自信をもってうまく相手と振舞うことができると同時に、不安緊張も低くなるとしている。また、加藤と鷺見（2001）によると、比較的自尊心の高い人は、低い人よりも、しばしば他者から好意をいだかれ、よりよい対人関係を築くことが可能であるとしている。

自己評価は、個人の様々な経験を通して形成される、自己の様々な側面に対する個人の評価である。一般に、高い自己評価は、高い自尊心に繋がるとされている。しかし、上田（1996）は、自己評価が低い人にとって、自己受容は自尊心の向上に重要な役割を果たしており、自己評価が低くても、今ある自分でもよいと感じている人、いわば自己受容的な人は、そのような自分に対しても自尊心を持ち続けられるとしている。そして、自己受容とは自己評価の高さや自尊心の高い状態と同じとは単純に言い切れないものを含んでいると指摘している。

目 的

本稿では、自己に関わる側面を、自己評価、自己受容、および、自尊心の関連から捉え、これらが互恵的対人関係意識に与える影響を明らかにする。さらにこれらが、対人関係の満足にどのような影響を及ぼすかについて明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象者と調査の概要

調査対象者は、東京都内の女子大学の学生94名であった。調査は、2010年10月22日の心理学系の講義時間の最初に、「女子大学生の友人関係に関する調査」という名目で実施された。調査は無記名であり、個人の友人関係を評価するものではないこと、また、結果は研究以外の目的には使用されないことが説明された。調査用紙は、調査対象者の回答終了後、その場で回収した。調査実施には、全体で約15分を要した。

質問紙の構成

調査用紙は、表紙を含めて5ページから構成された。

互恵的対人関係意識尺度

田中(2007b)の対人関係意識尺度(30項目)を使用した。調査対象者が回答に際して想定する対人関係を、より具体的にするために、「あなたと仲のよい同性の友人との関係についてお伺いいたします。まず、その友人とはどこで仲良くなりましたか。あてはまるものに1つ○をつけてください。」とし、いつ仲良くなった友人であるかを、小学校、中学校、高校、大学、アルバイト、その他から、一つを選ばせた。そして、想定した友人について、30項目の内容がどの程度自分にあてはまるのかについて、「全くあてはまらない」、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」、「非常にあてはまる」の7件法により回答を求めた。評定された7件法に対して、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の順に、1、2、3、4、5、6、7点を与えた。

対人関係の満足度

「あなたはその友人との関係にどの程度満足していますか」という質問に、「全然満足していない」、「満足していない」、「あまり満足していない」、「どちらともいえない」、「少し満足している」、「満足している」、「非常に満足している」の7件法により回答を求めた。評定された7件法に対して、「全然満足していない」から「非常に満足している」の順に、1、2、3、4、5、6、7点を与えた。

自己受容尺度

大出・澤田(1988)による自己受容尺度の4因子、すなわち、自己への好感・満足、他者への貢献、自己に失望しないこと、自己への自信から、それぞれの因子に高い負荷をもつ上位2項目を選び、計8項目で本研究の自己受容尺度を構成した。8項目の内容がどの程度自分にあてはまるのかについて、「全然そうだと思う」、「あまりそうとは思わない」、「だいたいそうだと思う」、「全くそうだと思う」の4件法により回答を求めた。評定された4件法に対して、「全然そうだと思う」から「全くそうだと思う」の順に、1、2、3、4点を与えた。なお、項目の「1. 私は、何か失敗すると、自分はだめな人間だと思うことがよくある。」と「4. 私は、他の人がうらやましい。」は、逆転項目であり、得点を逆転させた。

自己評価尺度

梶田(1988)による自己評価尺度の5因子、すなわち、自信、優越感、自己受容、自己

自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響（田中・高木）

防衛性、自己への素直さから、それぞれの因子に高い負荷をもつ上位2項目を選び、計10項目で本研究の自己評価尺度を構成した。10項目の内容がどの程度自分にあてはまるのかについて、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」の4件法により回答を求めた。評定された4件法に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の順に、1、2、3、4点を与えた。

自尊心尺度

Rosenberg (1965) により作成された自尊心に関する質問項目を山本・松井・山成 (1982) が翻訳した尺度 (10項目、清水, 2001) を使用した。10項目の内容がどの程度自分にあてはまるのかについて、「あてはまらない」、「ややあてはまらない」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」の5件法により回答を求めた。評定された5件法に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の順に、1、2、3、4、5点を与えた。なお、項目の「1. 敗北者だと思ふことがよくある。」、「2. 自分には、自慢できるところがあまりない。」、「3. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。」、「9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある。」、「10. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。」は、逆転項目であり、得点を逆転させた。

調査対象者の属性

調査対象者の年齢と学年を尋ねた。

結 果

調査対象者の特徴

調査対象者94名全てのデータが分析に用いられた。彼女らの平均年齢（標準偏差）は、19.71（±0.69）歳であり、学年は、大学2年生92.6%（87/94：数字は人数、以下同様に記す）、3年生5.3%（5/94）、不明2.1%（2/94）であった。

同性の友人と親しくなった時期

調査対象者が想定した同性の友人について、友人と親しくなった時期は、小学校19.1%（18/94）、中学校17.0%（16/94）、高校43.6%（41/94）、大学14.9%（14/94）、その他（幼稚園・保育園・趣味の活動・不明）5.4%（5/94）であった。 χ^2 検定の結果、回答の偏りは有意であった（ $\chi^2(4) = 38.021, p < .01$ ）。残差分析の結果、高校の時に親しくなった友人が、小学校、中学校、大学、その他の友人よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。

対人関係の満足度

友人との関係の満足度の平均点（標準偏差）は6.25（0.62）点であり、回答の分布は、5点（少し満足している）以上の回答が98.9%と、ほとんどの調査対象者が、友人との対人関係に満足していた。親しくなった時期別では、小学校6.11（0.76）点、中学校6.13（0.62）点、高校6.38（0.54）点、大学6.15（0.69）点、その他6.25（0.50）点であった。親しくなった時期による満足度の平均値の差の検定を行ったところ、親しくなった時期による有意な差は認められなかった（ $F(4,86) = 0.86, n.s.$ ）。

互恵的対人関係意識の構造

互恵的対人関係意識の構造を明らかにするために、まず、互恵的対人関係意識尺度の30項目について、因子分析（主因子解・プロマックス回転）を実施したところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮し、また、因子負荷の低い、あるいは、複数の因子に高く負荷している項目を削除し、最終的に、3因子が導出された（第3因子までの累積寄与率は、51.82%：表1）。第1因子は、「25：相手に利益を与えたなら、同程度の報酬を期待してよい。」、「20：相手のための苦労や負担には、何か見返りがほしい。」、「22：わざわざ予定をかけて相談にのってあげたなら、相手からは単なるお返し以上のことを期待してよい。」、「29：助けてあげたなら、次は自分が助けてもらえると思う。」、「8：誕生日プレゼントをあげたら、自分ももらわないと損だと思う。」などの項目から構成される『損得意識』と解釈された。第2因子は、「12：私は、私を支えてくれる人がいることに喜びを感じる。」、「16：助けてもらったとき、相手の好意や愛情を感じることもある。」、「3：お互いに支え合う対人関係は望ましい。」、「1：助けることによって、相手への好意や愛情が伝わると思う。」、「26：私は、相手から支えられることに喜びを感じる人が多い。」などの項目から構成される『互恵意識』と解釈された。第3因子は、「28：私は、私を助けてくれた相手の負担が気になることが多い。」、「4：休日返上で私の仕事の手伝いをしてくれた相手には、申し訳なさを感じる。」、「7：相手に必要以上の負担をかけたくない。」、「11：申し訳ないと思ったら、お礼をしなければならぬと思う。」、「18：何か物をもらおうと、お返しのことが気になる。」などの項目から構成される『返礼意識』と解釈された。この互恵的対人関係意識の構造は、田中・遊佐（2006）、田中（2007）と同様であった。

表1 互恵的対人関係意識の構造（主因子解・プロマックス回転） 因子分析結果

	損得意識	互恵意識	返礼意識	共通性
25: 相手に利益を与えたなら、同程度の報酬を期待してよい。	.85	-.05	-.15	.71
20: 相手のための苦労や負担には、何か見返りがほしい。	.84	-.14	.08	.73
22: わざわざ予定をかえて相談にのってあげたなら、相手からは単なるお返し以上のことを期待してよい。	.76	-.13	-.06	.58
29: 助けてあげたなら、次は自分が助けてもらえると思う。	.73	.09	-.16	.53
8: 誕生日プレゼントをあげたら、自分ももらわないと損だと思う。	.71	.08	.09	.55
17: 助けた相手には、私が払った負担をわかってほしい。	.69	-.13	.20	.56
10: 相手に何かしてあげたら、自分も同じだけのことをしてもらえるとと思う。	.67	-.13	.20	.56
27: 普段自分が助けている相手には、多少の無理を言ってもよい。	.67	.10	-.17	.33
5: 自分の利益と相手の利益は同じであるべきだと思う。	.44	-.02	.25	.29
12: 私は、私を支えてくれる人がいることに喜びを感じる。	-.04	.82	-.02	.67
16: 助けてもらったとき、相手の好意や愛情を感じることもある。	.09	.71	-.06	.51
3: お互いに支え合う対人関係は望ましい。	.24	.66	.04	.45
1: 助けることによって、相手への好意や愛情が伝わると思う。	.24	.66	-.22	.49
26: 私は、相手から支えられることに喜びを感じる人が多い。	.09	.65	-.04	.43
9: 相手がいってくれたから、頑張れたと思うことが多い。	-.14	.62	-.04	.40
19: 私は、相手を支えることに喜びを感じる人が多い。	-.19	.56	.12	.37
24: 人付き合いにおいて、相手から支えられているという意識は大切である。	.13	.51	.24	.38
30: 自分に負担があっても、相手の喜ぶ顔を見れば満足である。	-.21	.50	.06	.29
28: 私は、私を助けてくれた相手の負担が気になることが多い。	-.14	.05	.73	.54
4: 休日返上で私の仕事の手伝いをしてくれた相手には、申し訳なさを感じる。	.03	-.11	.65	.42
7: 相手に必要以上の負担をかけたくない。	-.11	.06	.59	.36
11: 申し訳ないと思ったら、お礼をしなければならぬと思う。	.19	.17	.50	.36
18: 何か物をもらおうと、お返しのが気になる。	.20	.05	.44	.26
15: 私が助けを求めたとき、それに応えてくれた相手には頭が上がらなくなる。	.00	-.13	.38	.15
α 係数	.89	.85	.71	
因子間相関	損得意識	.04	.15	
	互恵意識		.13	

自己評価の構造

自己評価の構造を明らかにするために、まず、自己評価尺度の10項目について、因子分析（主因子解・バリマックス回転）を実施したところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮し、また、因子負荷の低い、あるいは、複数の因子に高く負荷している項目を削除し、最終的に、2因子が導出された（第2因子までの累積寄与率は、66.29%：表2）。第1因子は、「4：私は時々自分自身がいやになるときがある。」「7：私は人より劣っていると感じることもある。」「10：私は今のままの自分ではいけないと思うことがある。」などの項目から構成される『自己嫌悪』と解釈された。第2因子は、「2：私は何か

表2 自己評価的意識の構造（主因子解・バリマックス回転）

	自己嫌悪	他者評価懸念	共通性
4：私は時々自分自身がいやになることがある。	.97	.11	.95
7：私は人より劣っていると感じることもある。	.61	.30	.46
10：私は今のままの自分ではいけないと思うことがある。	.49	.20	.28
2：私は何かをしようとするとき、他の人が反対するのではないかと心配になることがある。	.12	.84	.72
5：私は自分が少しでも人からよく見られたいと思うことがある。	.22	.60	.40
6：私は自分が傷つくことを恐れている。	.25	.58	.40
負荷量の平方和	1.67	1.55	
寄与率 (%)	46.76	66.29	
α 係数	.74	.73	

をしようとするとき、他の人が反対するのではないかと心配になることがある。』、「5：私は自分が少しでも人からよく見られたいと思うことがある。』、「6：私は自分が傷つくことを恐れている。」などの項目から構成される『他者評価懸念』と解釈された。

自己受容の構造

自己受容の構造を明らかにするために、自己受容尺度項目の8項目について、因子分析（主因子解・バリマックス回転）を実施したところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して2因子が導出されたが、第2因子は、1項目（3：私は、自分に自信がある。）のみであり、負荷量が第1因子に.46、第2因子に.64であった。そこで、他の7項目から構成される自己受容的意識の構造の次元性の確認を主成分分析により行った。結果は、第1主成分の負荷量の絶対値はいずれも.65以上で、寄与率は53.9%であったことから、構

表3 自己受容の構造（主成分分析）

	負荷量
7：私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思わない。	.80
2：私は、欠点があっても、自分が好きだ。	.79
5：私は、何か人のために役にたっている。	.77
8：私は、人から必要とされていると思う。	.73
6：私は、自分は自分とわりきることができる。	.71
1：私は、何か失敗すると、自分はだめな人間だと思うことがよくある。	.67
4：私は、他の人がうらやましい。	.65
固有値	3.77
α 係数	.86

自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響（田中・高木）

造の一次元性が確認された（表3）。

自尊心の構造

自尊心の構造を明らかにするために、自尊心尺度項目の10項目について、因子分析（主因子解・バリマックス回転）を実施したところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して2因子が導出されたが、第2因子を構成する項目が1項目（10：もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。）のみであり、また、共通性が.13であった。そこで、他の9項目から構成される自尊心の構造の一次元性の確認を主成分分析により行った。結果は、第1主成分の負荷量の絶対値はいずれも.71以上で、寄与率は66.8%であったことから、構造の一次元性が確認された（表4）。

表4 自尊心の構造（主成分分析）

	負荷量
3：何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	.89
2：自分には、自慢できるところがあまりない。	.87
8：色々な良い素質をもっている。	.86
4：だいたいにおいて、自分に満足している。	.84
6：少なくとも人並みには、価値のある人間である。	.82
7：自分に対して肯定的である。	.81
5：物事を人並みには、うまくやれる。	.78
9：自分は全くだめな人間だと思うことがある。	.77
1：敗北者だと思うことがよくある。	.71
	固有値 6.01
	α 係数 .94

自己評価、自己受容、自尊心、および、互恵的対人関係意識と対人関係満足度の関連

自己評価、自己受容、自尊心、および、互恵的対人関係意識と対人関係満足度の関連を明らかにするために、SEMによるパス解析を行った。モデルの適合度は、GFI=.916、AGFI=.835、CFI=.940であり、妥当なモデルであると判断できた（図2）。

パス解析の結果、自己評価、自己受容、自尊心から互恵的対人関係意識への関連については、2つの流れが認められた。1つ目は、自己評価の自己嫌悪の程度が高ければ自己受容の程度が低く（ $\beta = -.71, p < .001$ ）、自己受容が低ければ自尊心が低く（ $\beta = .88, p < .001$ ）、自尊心が低ければ返礼意識が高い（ $\beta = -.35, p < .001$ ）という一連のパス（間

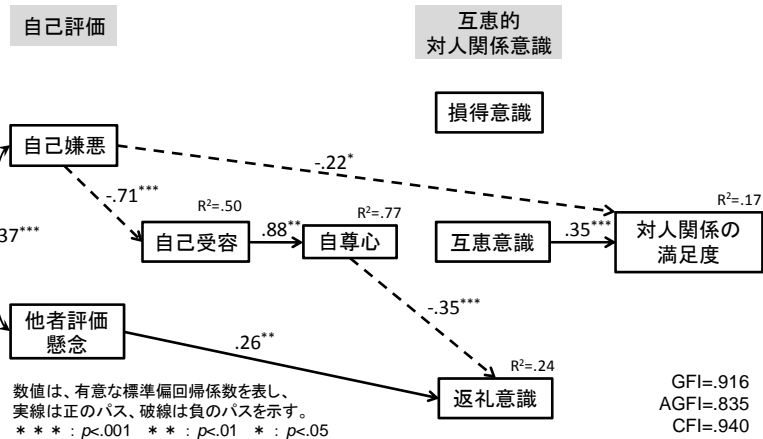


図2 自己評価、自己受容、自尊心、および、互恵的対人関係意識と対人関係満足度の関連 (パス解析)

接効果： $\beta = .22$)である。2つ目は、自己評価の他者評価懸念の程度が高ければ返礼意識が高い ($\beta = .26, p < .01$) というパスである。なお、自己評価、自己受容、および、自尊心は、互恵的対人関係意識の下位意識である損得意識と互恵意識との関連が認められなかった。

次に、対人関係の満足度に影響を与えているパスには、2つの流れが認められた。1つ目は、自己評価の自己嫌悪の程度が高ければ対人関係の満足度が低い ($\beta = -.22, p < .001$) というパスである。2つ目は、互恵的対人関係の互恵意識が高ければ対人関係の満足度が高い ($\beta = .35, p < .001$) というパスである。なお、互恵的対人関係意識の下位意識である損得意識と返礼意識は、対人関係の満足度との関連が認められなかった。

考 察

互恵的対人関係意識の構造は、「互恵意識」、「返礼意識」、「損得意識」とそれぞれ解釈される3つの因子(下位意識)から構成される構造であり、これまでの研究(田中・遊佐, 2006; 田中, 2007)と同様の結果であった。このことは、互恵的対人関係尺度の因子的妥当性を示していると考えられる。また、3因子の因子間相関は、互恵意識と損得意識が $r = .04$ 、互恵意識と返礼意識が $r = .13$ 、返礼意識と損得意識が $r = .15$ と、ほとんど有意な相関でないことから、各下位意識は独立していると考えられる。

自己評価、自己受容、および、自尊心の関連については、自己評価の自己嫌悪から自己受容への負の影響が認められたが、自己評価の自尊心への直接の影響は認められなかった。

これは、上田（1996）が、自己評価の高さは自尊心の高さと関係があるが、自己評価が低くても、自己受容的な人は自尊心を持ち続けられるという指摘を支持するものである。

互恵的対人関係意識への自己評価、自己受容、および、自尊心の影響については、自己評価の自己嫌悪が自己受容と自尊心を媒介して返礼意識を規定する間接効果と、自己評価の他者評価懸念が返礼意識を規定する正の直接効果が認められた。対人関係において、自己への低い評価による自己受容の低さが、自尊心を低下させることは、「相手の負担が気になる」、「申し訳ない」、「頭が上がらない」などの他者への心理的負債感を高めると解釈できる。また、他者から低い評価を受けるのではないか、あるいは、「少しでも良く見られたいと願う」ことが、対人関係において、「相手に必要以上の負担をかけること」や、「かけた負担に対するお礼が気になる」などの他者への心理的負債感を高めると解釈できる。

互恵的対人関係意識を介した対人関係の満足度への自己評価、自己受容、および自尊心の影響については、互恵的対人関係の互恵意識が対人関係満足度を規定する正の直接効果と、自己評価の自己嫌悪が対人関係満足度を規定する負の直接効果が認められた。「相手を支えること」や「相手から支えられること」に喜びや感謝の気持ちをもちながら「お互いに支え合う対人関係は望ましい」という互恵意識は、依存と支援の安定したやりとりを意味し、そこから得られる対人関係の満足に繋がると解釈できる。また、自己への低い評価が、自己受容や自尊心を媒介せず、直接に、他者との関係満足を低めていることは、対人関係における自己評価の重要性を示唆するものと考えられる。

なお、対人関係の満足度に対して、互恵的対人関係意識の下位意識である「損得意識」と「返礼意識」からの規定関係が認められなかったことは、本研究のデータの特徴と関連すると考えられる。すなわち、本研究のデータは、1. 全員が女子大学生であり、2. その多くが、高校生の時に親しくなった同性の友人との対人関係について回答しており、3. ほぼ全て（98.9%）の調査対象者が、その対人関係に満足しているという3点が理由としてあげられる。特に、3つ目の特徴である対人関係の満足度の高さは、調査の最初に、「あなたと仲のよい同性の友人との関係についてお伺いいたします。」と教示しているためであるとも考えられるが、このような親しい対人関係は、比較的安定した関係であるといえる。すなわち、本研究のデータには、対人関係の満足度が低い、不安定な対人関係は含まれていないと考えられる。損得意識が高い、つまり、「相手への負担感」や「相手からのお返しや見返り」を期待する対人関係や、返礼意識が高い、つまり、「相手への負債感」や「相手へのお礼」に気を配る対人関係は、「負担感」や「負債感」が強い不快な状態であり、これらは共に、不安定な対人関係であるため、「損得意識」と「返礼意識」から「対人関係の満

足度」への規定関係が認められなかったと考えられる。今後は、調査対象者が想定する友人を、「あなたと顔見知り以上の同性の友人関係について」などの教示により、より広い友人関係のデータとの比較を行うことから、互恵的対人関係意識と対人関係の満足度との関連を検討することが望まれる。

注

- 1) 互恵的対人関係意識については、先の研究、つまり、田中（2005）では対人意識、田中（2006, 2007a, 2007b）、田中・遊佐（2006）では対人関係意識としていたが、互恵的相互依存関係における対人関係に関する意識であることを強調する意味からも、同じ概念を表す用語として互恵的対人関係意識としている。

引用文献

- Clark, M. S. & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Clark, M. S., Ouellette, R., Powell, M. C., & Milberg, S. (1987). Recipient's mood, relationship type, and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 94-103.
- Gouldner, A. W. (1960). The norm of reciprocity; A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Gurian, J. P. (1984). Dependency In J. Gould & W. B. Kolb (Eds.) *A Dictionary of Social Sciences*. New York: Free Press. Pp.189-190.
- ジョンソン F. A. 江口重幸・五木田 紳（訳）（1997）。「甘え」と依存——精神分析的・人類学的研究——弘文堂（Johnson. F. A. (1993). *Dependency and Japanese socialization Psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York University Press.)
- 城崎真澄・藤原珠江（2005）. 女子大学生が友人関係の中で感じる罪悪感についての一考察 長崎純心大学心理教育相談センター紀要, 4, 43-56.
- 梶田毅一（1988）. 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会.
- 加藤乃武英・鷲見克典（2001）. 対人関係における互恵性におよぼす自尊感情の影響——Robson 多次元自尊感情尺度を用いた検討—— 名古屋工業大学紀要, 53, 195-206.
- 諸井克英（1993）. 親密な関係の社会心理学（1）: 共同的関係と交換的關係 人文論集（静岡大学人文学部社会科学・言語文化学科研究報告）, 44(1), 1-35.
- Nemeth, C. (1970). Effects of free versus constrained behavior on attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 302-311.
- 西川正行（1987）. 規範と援助 中村陽吉・高木修（編）「他者を助ける行動」の心理学 光生館 Pp.89-101.
- 大出美和子・澤田秀一（1988）. 自己受容に関する——研究——様相と関連要因をめぐって—— カウンセリング研究, 20 (2), 128-137.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.

自己評価、自己受容、および自尊心が互恵的対人関係意識を介して対人関係満足に及ぼす影響 (田中・高木)

- 清水 裕 (2001). 自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) 堀 洋道 (監) 山本真理子 (編) 心理尺度
ファイル 垣内出版 pp.29-31.
- 田中 優 (2005). 互恵的相互依存関係に関する予備的研究 — 依存欲求と支援欲求の構造、および、互
恵的相互依存関係過程モデルの提案 — 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係額研究, 6,
223-232.
- 田中 優 (2006). 互恵的相互依存関係の研究 関西大学大学院社会学研究科博士論文 (未公開)
- 田中 優 (2007a). 互恵的相互依存関係過程モデルの提案 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係額
研究, 7, 1-19.
- 田中 優 (2007b). 対人関係意識尺度の作成 日本心理学会第71会大会発表論文集, 114.
- 田中 優・遊佐ちひろ (2006). 互恵的相互依存関係過程モデルの検討 (2) — 対人関係意識尺度作成
の試みと大学生の対人関係意識について — 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 692-693.
- Tesser, A., Gatewood, R. & Driver, M. (1968). Some determinants of gratitude. *Journal of Personality
and Social Psychology*, 9, 233-236.
- 上田琢哉 (1996). 自己受容概念の再検討 — 自己評価の低い人の“上手なあきらめ”として — 心理
学研究, 67(4), 327-332.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

—2010. 11. 8 受稿—

Appendix

【互恵的対人関係意識項目】

- 1：助けることによって、相手への好意や愛情が伝わると思う。
- 2：一生懸命教えてもらったとき、うまくできないと申し訳なく思う。
- 3：お互いに支え合う対人関係は望ましい。
- 4：休日返上で私の仕事の手伝いをしてくれた相手には、申し訳なさを感じる。
- 5：自分の利益と相手の利益は同じであるべきだと思う。
- 6：仕事の手伝いをしてもらったとき、相手も満足してくれるとうれしい。
- 7：相手に必要以上の負担をかけたくない。
- 8：誕生日プレゼントをあげたら、自分ももらわないと損だと思う。
- 9：相手がいてくれたから、頑張れたと思うことが多い。
- 10：相手に何かしてあげたら、自分も同じだけのことをしてもらえるとと思う。
- 11：申し訳ないと思ったら、お礼をしなければならぬと思う。
- 12：私は、私を支えてくれる人がいることに喜びを感じる。
- 13：助けた相手が喜んでいても、自分は損をしたように感じる時がある。
- 14：わざわざ予定をかえて相談にのってくれた相手には、単なるお返し以上のことをすべきだ。
- 15：私が助けを求めたとき、それに応えてくれた相手には頭が上がりなくなる。
- 16：助けてもらったとき、相手の好意や愛情を感じる時がある。
- 17：助けた相手には、私が払った負担をわかってほしい。
- 18：何か物をもらおうと、お返しのことが気になる。
- 19：私は、相手を支えることに喜びを感じる時が多い。
- 20：相手のための苦労や負担には、何か見返りがほしい。
- 21：私は、助けてもらったなら、相手に借りができたような気になる。
- 22：わざわざ予定をかえて相談にのってあげたなら、相手からは単なるお返し以上のことを期待してよい。
- 23：相手に負担をかけてまで、助けてもらうべきではない。
- 24：人付き合いにおいて、相手から支えられているという意識は大切である。
- 25：相手に利益を与えたなら、同程度の報酬を期待してよい。
- 26：私は、相手から支えられることに喜びを感じる時が多い。
- 27：普段自分が助けている相手には、多少の無理を言ってもよい。
- 28：私は、私を助けてくれた相手の負担が気になる時が多い。
- 29：助けてあげたなら、次は自分が助けてもらえるとと思う。
- 30：自分に負担があっても、相手の喜ぶ顔を見れば満足である。